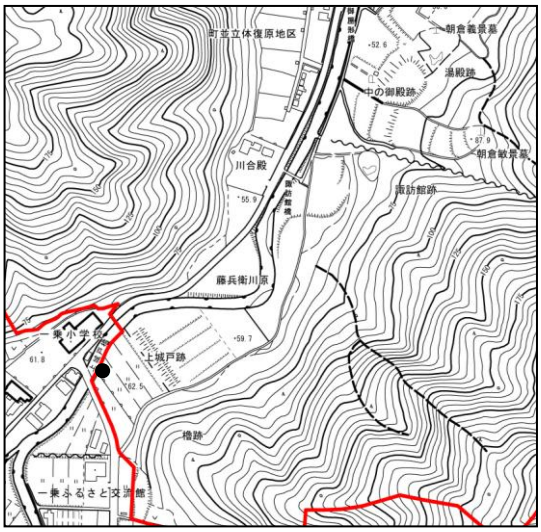
11. 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡

とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき

所 在 地：福井市東新町字上ノ木戸
調査原因：一乗谷川河川改修（第 148 次発掘調査）
調査期間：平成 28 年５月９日～６月 30 日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：200 ㎡
時　　代：中世～近代



位置図（S＝1/50,000）

調査の概要　特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏が５代約 100 年にわたって越前支配の拠点とした都市遺跡です。特別史跡指定範囲の約 278ha の内、これまで一乗谷川沿いの平地部を中心に発掘調査が進められ、計画的な町作りの様子が明らかとなっています。

第 148 次発掘調査地は、城下町主要部の南を画す上城戸跡の外側、一乗谷川右岸に位置します。上城戸橋のたもとから延長約 40m、幅約５ｍの範囲です。

調査の結果､一乗谷川に並行する護岸石積みとその間を走る砂利敷き道路を検出しました。

遺　構　護岸石積みは南東に面し、一乗谷川を背にしています。高さは約 1.3mを測り、主に人頭大の河原石を 55～60°の傾斜で６～７段積んでいます。石積みの基底は河川堆積とみられる砂礫面にあり、現地表面からの深さは北側で約 2.3m、一段高く造成されている南側で約３ｍを測ります。石積みの埋土には旧水田の床土が２面認められ、２面とも調査区南半が数十㎝高く、段となる境にも石を積んでいました。

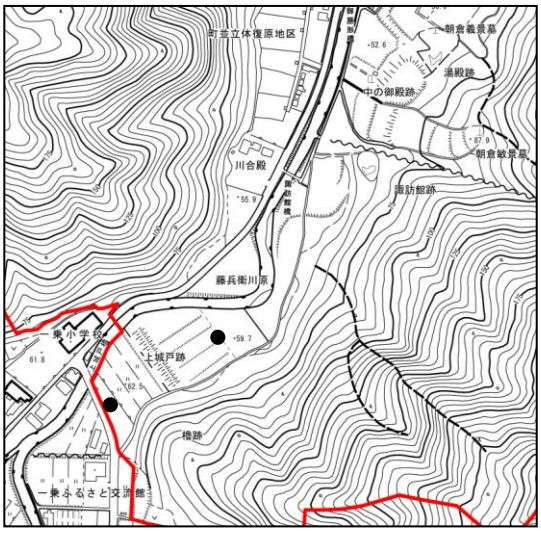
砂利敷き道路は数㎝程度の玉砂利が敷き詰められ、固く締まっていました。一部を断ち割って下層も調査しましたが、これ以外に道路面は確認できませんでした。

遺　物　越前焼や土師質土器、瀬戸・美濃焼、青磁・白磁・染付といった中国製陶磁器など、朝倉氏遺跡で通有の遺物が出土しています。また、近世以降のものも少なからず出土しており、それは石積み基底の砂礫層にも及んでいました。

まとめ　当調査区を含めた上城戸跡南側の地区は、昭和 40 年代の土地改良によって水田区画が大きく変わっています。土地改良事業前の地形図を参照すると、当調査区にあたる場所には一乗谷川に沿って連なる水田区画が認められ、これが石積み埋土で確認した上位の水田面と考えられます。同様の状況は明治年間の地籍図においてもおおよそ追認でき、下位の水田面がそれにあたると推測されます。また、一乗谷川沿いに道路があったことも両図面で確認できます。一方、旧水田下の河川とそれに伴う護岸石積みがどの程度さかのぼるのかは今のところ不明です。ただ、河床とみられる砂礫から近代以降の瓦片が出土していることや石積みの積み方からみて、近い時期の所産と考えられます。したがって、当調査区における朝倉期の遺構はこれらによって消失しており、石積埋土より出土した中世の遺物群は、主に調査区東方を削平した造成土に含まれたものと考えられます。（田中祐二）

とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
12. 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡

所 在 地：福井市城戸ノ内町字門ノ内・上城戸、
東新町字上ノ木戸
調査原因：史跡整備（第 149 次発掘調査）
調査期間：平成 28 年 7 月 19 日～9 月 30 日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：300 ㎡
時　　代：中世



位置図（S＝1/50,000）

調査の概要　第 149 次発掘調査は、城下町主要部の南を画す上城戸跡周辺で実施しました。上城戸跡は敵の侵入を防ぐために築かれた長大な土塁と濠ですが、土地改良など後世の改変もあって、出入に利用されたルートが明確ではありません。そのため近年の発掘調査では、上城戸跡周辺で当時利用された幹線道路の検出に主眼を置いて実施してきました。今回は、上城戸跡の内側で、以前部分的に検出した道路跡が山際を走った後、屋敷地を画す濠（大溝）に突き当たって折れ、一乗谷川の方へ向かって延びると想定し、３本のトレンチ（１～３トレンチ）を設定しました。また、上城戸跡の外側でも遺構確認のために１本のトレンチ（４トレンチ）を設定しました。

調査の結果、１～３トレンチで一乗谷川の方へ向かって延びる石組溝を検出しました。しかし、土地改良によって削平を受けていることもあり、道路の側溝と認定するには至りませんでした。また、４トレンチにおいても削平が著しく、遺構はほとんど確認できませんでしたが、一乗谷川に並行して石列を伴う段を検出しました。

遺　構　１トレンチの石組溝（溝Ａ）は、平成 24 年度の第 138 次調査（８トレンチ）で検出した道路１の側溝と同一のもので、再検出した部分もあわせて南北方向に約 4.5ｍを確認しました。幅 0.2～0.3ｍを測り、側石は１段です。溝Ａの北端は東西方向の石組溝（溝Ｂ）に接続します。溝Ｂは幅約 0.8ｍを測り、今回検出した範囲において溝ＡとＬ字状に接続しています。ただし、トレンチ東壁の土層を観察すると、東方（山側）へも延びているようであり、実際にはＴ字に接続するものと考えられます。

２トレンチの石組溝（溝Ｃ）は南北方向に約 3.0ｍを確認しました。幅約 0.4ｍを測り、側石は２段です。南端で東方へ折れているようであり、その方向から１トレンチの溝Ｂと一連の溝であることがうかがえます。また、溝Ｃの約４ｍ北側で石列を検出しました。この石列は溝Ｃ側石の検出面と同一面上にあり、溝Ｃのものに比べ小ぶりの石を用いています。溝Ｃの東側石上端にも小ぶりの石が並んでおり、これとほぼ並行することから対になる可能性があります。

３トレンチの石組溝（溝Ｄ）は東西方向に約 1.3ｍを確認しました。幅 0.2～0.3ｍを測り、側石は１段です。溝Ｂ・Ｃと一連の溝の可能性があります。

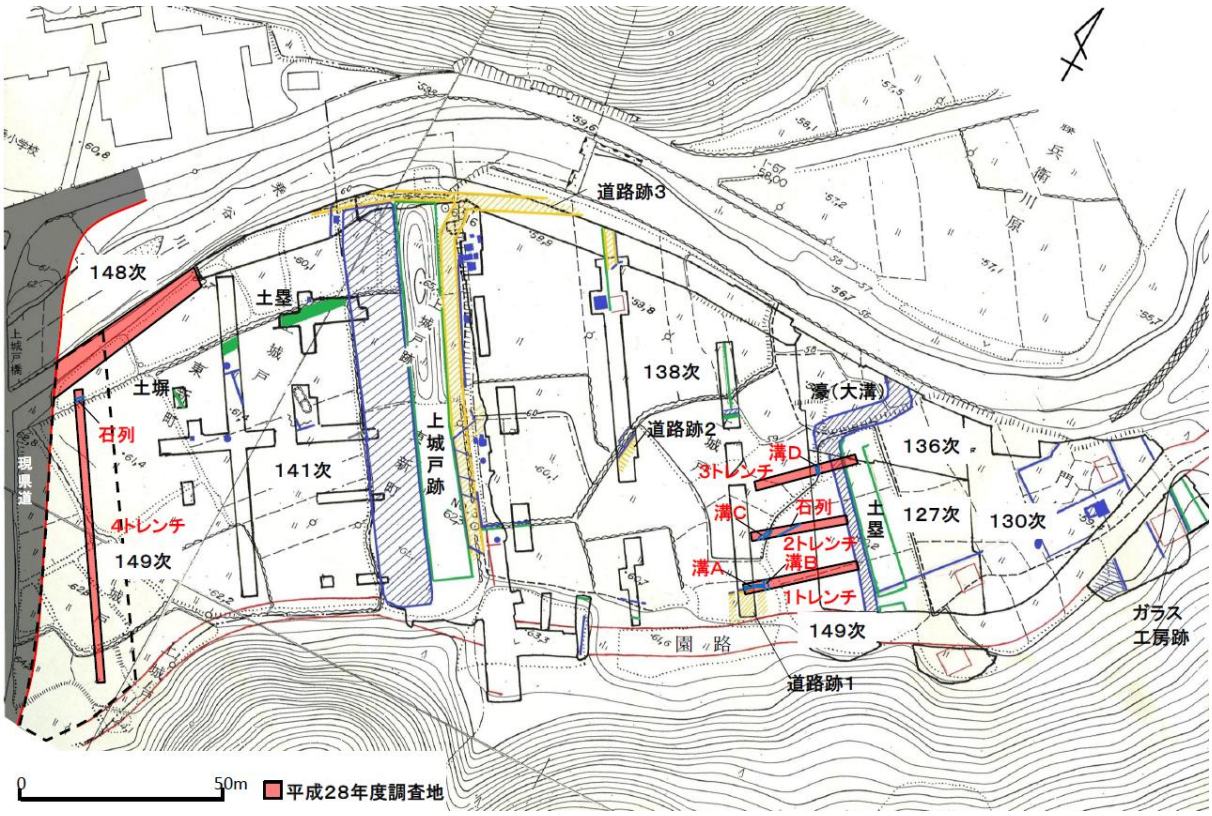
なお、いずれのトレンチにおいても道路面となる砂利敷きなどは確認できませんでした。これは後世の耕作や土地改良で削平されたためと考えられます。また、３トレンチの北側では第 136 次調査で検出した濠（ＳＤ6279）南肩の続きとみられる落ち込みを検出しましたが、１・２トレンチでその延長は確認できませんでした。両トレンチの下層は湿地のような堆積状況で、土師質土器の細片を含んでいました。これは幹線道路敷設以前の状況を示しており、濠との関連は今後の課題となります。

４トレンチでは西端で石列を伴う段を確認しました。この段は圃場整備前の地形図に見える水田の境にあたるようであり、同時に平成 25 年度の第 141 次調査で検出した土塁（ＳＡ6908・6918）の西縁と一連の可能性があります。４トレンチではこれ以外の遺構は確認できず、広く削平を受けているものと考えられます。

遺　物　各トレンチから越前焼や土師質土器、瀬戸・美濃焼、青磁・白磁・染付といった中国製陶磁器、笏谷石製の行火（バンドコ）など、朝倉氏遺跡で通有の遺物が出土しています。その他、特筆すべき遺物に２トレンチから出土した小柄の鞘があります。黒漆塗りに沈金を施したもので、遺存状態はきわめて良好です。

まとめ　幹線道路については、溝Ｂ～Ｄが一連の道路側溝とすれば、東側の山際に沿って進んできた後、想定どおり西（一乗谷川側）へ屈曲し、さらに数回の屈曲を経ることとなります。ただし、道路面を検出できなかったため、確証は得られませんでした。

上城戸跡南側での遺構確認では、上城戸跡の外濠南縁から一乗谷川に並行して延びる土塁がここまで及んでいる可能性が示されました。今後はその確証を得るとともに、その性格を追及していく必要があります。（田中祐二）



第 148・149 次発掘調査区および上城戸跡周辺の調査状況

写真１　１トレンチ石組溝全景（南西より）

写真２　１トレンチ石組溝遺物出土状況（東より）

写真３　２トレンチ遺構全景（南西より）

写真４　２トレンチ石組溝近景（東より）

写真５　３トレンチ全景（南西より）

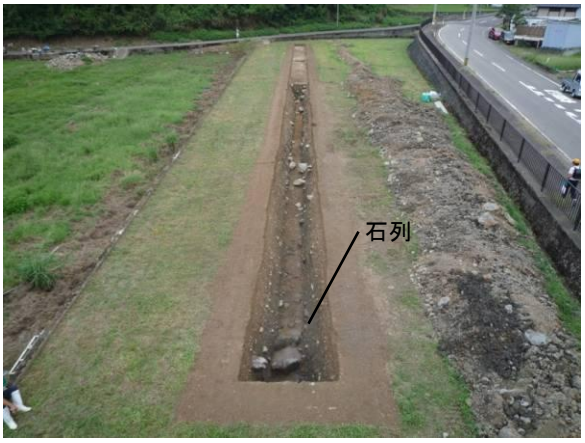


写真６　４トレンチ全景（北西より）